
北海道大学総合博物館 ボランティア ニュース

No. 68. 2024. 4

伊福部音楽とアイヌの歌	-----	伊福部 達	1
アイ アイ ゴムテイラ	-----	木村 則子	3
大氷原にホッキョクグマを求めて	-----	坪田 敏男	5
雪の妖精 シマエナガ ～私たちが「範」とすべき素晴らしき生態～	-----	山本 光一	6
円山動物園を訪ねて	-----	尾崎 美雪	7
ポプラチェンバロで奏でるイギリス黄金時代の鍵盤作品	-----	新妻 美紀	8

特別寄稿

伊福部音楽とアイヌの歌

東京大学・先端科学技術研究センター・研究顧問/名誉教授、北海道大学・名誉教授

伊福部 達

先日、映画「ゴジラ -1.0」を観てきた(図1)。映画のシーンの多くは実写とCGの組み合わせで描いたというが、そのゴジラの動きは今までのものとは違った迫力があり圧倒された。実は、映画鑑賞のもう一つの狙いはバックに流れる音楽にあった。伊福部音楽というゴジラが代名詞ようになっており、身内の一人としてゴジラ映画はできるだけ逃さないようにしていた。終盤のクライマックスに近づくと「ドシラ、ドシラ、ドシラソラシドシラ」が大音響で鳴り始め、その音が空気を振動させ全身に伝わってきた。

私が若かったころは上京するたびに叔父の家を訪ねて、叔父の音楽観は言うまでもなく、弟子たちのプライベートな話までも聞かせてもらった。時には、作曲半ばのギター音楽を自らリュート(ギターの原型の古楽器)で弾いてくれて、感想を求められたこともあった。実は、そのような音楽談義の中でもゴジラ音楽の話は聞いたことがない。

しつこく聞いても「あれは違うものだから」といって話そうとしなかった。「映画音楽は映像に付随する効果音なので、音楽だけを切り出しても意味がない」とも言っていたが、ゴジラ音楽ばかり話題にされるのが不本意であったのかも知れない。

しかし、叔父の映画音楽が切っ掛けとなって伊福部音楽にのめり込んでいった人たちも多い。



図1 「ゴジラ -1.0」の上映映画館(TOHO シネマズ すすきの)の前に展示されていたゴジラの模型(筆者による撮影)

その一人として音楽評論家で著名な片山杜秀氏(慶応大学教授)がいるが、彼が最近「大衆必易ーわたくしの伊福部昭伝ー」(新潮社 2024、図2)と題した本を著している。

「大楽必易」とは「優れた音楽は誰にも分かりやすいものだ」という意味である。この本を読んでみて、著者の惚れ込み様と同時に、映画音楽の与える影響の大きさに驚いている。

その著書の中で、叔父の音楽には、ロシアの楽器バラライカによる民謡や中国の明朝時代の一弦琴そしてアイヌの音楽の特質が色濃く残っており、日本というよりも汎ユーラシ的なリズムとメロディーが宿っていると書かれており、納得する思いであった。

叔父は、小学生のとき道東の音更に2年間ほど住んでおり、ロシアや中国の音だけでなく、そこで見聞きしたアイヌの踊り歌で、民族の違いによる音楽の多様性を漠然と感じ取ったそうである。確かに、叔父の曲のどれをとっても、北方系の民族が入り混じっていた北海道で生まれ育ったが故に生まれた音楽が多いように感じる。



図2 片山杜秀著『大楽必易』の表紙 (新潮社 2024)

アイヌ音楽では、同じメロディーやリズムが執拗に繰り返えされ、その繰り返しの中に即興的に今の想いを伝える歌が入り込んで、リズムが不規則に乱れる曲が多い。その繰り返しは「オスティナート」と呼ばれ、不規則に乱れるリズムは「変拍子」とな



図3 開発した触針とレーザーによる蝋管再生機 (最終版)

る。ゴジラの音楽の「タタタ」「タタタ」の3拍子の繰り返しの後に「タタタタタタタタ」と9拍子がくるのだから、そのオスティナートと変拍子はアイヌ音楽の影響を受けたに違いない。

ただし、前述のように、叔父はゴジラ音楽ばかりが採り上げられるのを口惜しく思っていたことも想像される。そのことは、北海道にいる北方少数民族の歌をモチーフにした3つの歌曲について聞くと、叔父には珍しく饒舌になったことから窺える。

ところで40年以上も前になるが、ポーランドのプロニスワフ・ピウスツキという人類学者が1900年の初頭に樺太アイヌの歌や音楽を蝋管レコードに100本ほど録音していたのが偶然発見され、それを私に再生して欲しいと依頼されたことがある。紆余曲折を経てポーランド政府の許可が下り、JALの特別機に乗って何とか私がいた北大の応用電気研究所に運ばれてきた。その中から傷んでいない蝋管を選び、再生するための機器を試行錯誤で開発し(図3)、一部ではあるが何とか再生に成功した(参考: NHKドキュメンタリーTV特集「ユーカラ沈黙の80年」1984年放送)。

その再生、記録、分析のために大きなプロジェクトが立ち上がっていたが、アイヌ音楽の解析のところは叔父に代表者になってもらった。

プロジェクトも終わりに近づいた時に、再生した樺太アイヌの歌(実際には北海道アイヌの歌だと判明された)を聞いてもらおうと、音源を持って叔父の家を訪ねたことがある。

～北の海に死ぬ鳥の歌～

<アイヌの叙事詩に依る対話体牧歌>
—第2楽章—

Yaishama ne na
北の海に死ぬ鳥の歌

Yaishama ne na			
Yaishama ne na		ヤイシャマネナ	
Yaishama ne na			
Atui-so ka-ta	Hu ara o	海の上で	フーアラオー
Pinne chirpo	Hu ara o	オスの小鳥が	フーアラオー
Tepaakan tepaakan	Hu ara o	今にも沈みそうになってゐる	フーアラオー
Yaishama ne na		ヤイシャマネナ	
Yaishama ne na			

Yaishama ne na			
Yaishama ne na		ヤイシャマネナ	
Yaishama ne na			
San-ota Kata	Hu ara o	浜の砂の上で	フーアラオー
Matne chirpo	Hu ara o	雌の小鳥が	フーアラオー
Rimimse rimimse	Hu ara o	泣き叫んで助けを求めてゐる	フーアラオー
Yaishama ne na			
Yaishama ne na		ヤイシャマネナ	

図4 叔父が訳した『アイヌの叙事詩に依る対話体牧歌』の第2楽章の詩。「ヤイシャマネナ」はアイヌの歌の中に繰り返して出てくる囃子言葉でその合間に即興の歌が入る

もう出来たのかと驚きながらも、雑音の中に埋もれて聞き取るのが難しいような再生音にも熱心に耳を傾けてくれた。そして蠟管レコードを聴き終えると思いかげず話題が昔話へと広がっていった。

叔父が北大の研究員だった時に服部健という人類学の先生と共に録音機を担いで樺太に行きアイヌ、オロッコ、ギリヤークと呼ばれる北方少数民族の歌を録音し、歌詞をアルファベットにして残したという。

当時の録音は、テープではなく音を磁気にして金属線に吹き込む方法しかなく、しかもその録音機はとても重かったそうである。そして「金属線に吹き込まれた歌を再生する装置はあるのかな、再生して

聞いてみたい」と呟くように言っていた。ただ、その金属線は行方不明のままであったので、見つかったら是非とも私が再生しますと約束したが、結局見つからないまま叔父は他界してしまった。3つの歌曲のモチーフはきっとあの金属線にあるに違いないと思いつつ時が経って、今となっては蠟管レコードの再生作業と結びついて金属線の話は遠い昔の思い出となった。なお、これがモチーフとなった代表的な3歌曲の題名は「ギリヤーク族の古き吟誦歌」、「サハリン島先住民の三つの揺籃歌」、そして「アイヌの叙事詩に依る対話体牧歌」(図4)である。

これらを聞くたびに、重い蓄音機を持ち歩いて、アイヌ、オロッコ、ギリヤークの幻の歌を夢中で録音・記録していた様子が眼に浮かぶようである。

ゴジラ音楽をきっかけに、北海道だからこそ生まれた、北方少数民族の歌をモチーフにした伊福部昭歌曲の原点に思いを馳せて頂ければ幸いである。

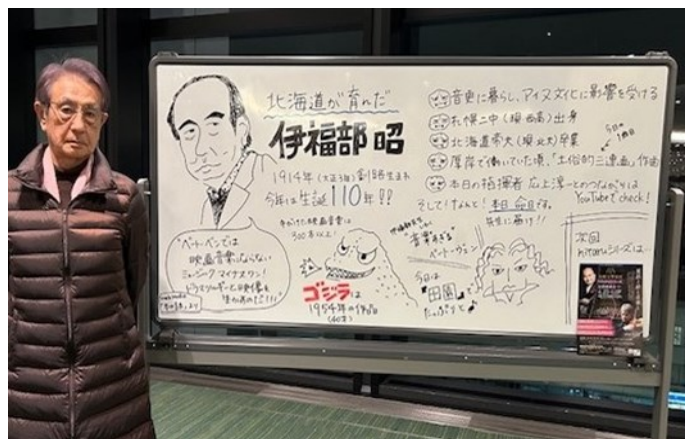


図5 2024年2月8日の札幌交響楽団 hitaru シリーズ定期演奏会の会場に展示されていた伊福部昭の紹介パネル(左に立つのは筆者)

アイ アイ ゴムテイラ

考古ボランティア 木村則子

2024年2月8日札幌文化芸術劇場において指揮広上淳一で札幌交響楽団 hitaru シリーズ定期演奏会が催された。曲目は伊福部昭「土俗的三連画」、

モーツァルト「ピアノ協奏曲 20 番」、ベートーヴェン「交響曲 6 番(田園)」で、私も聴きに行っていた。

この日のプログラム冊子には、北海道大学総合博物館から許可を得て掲載された伊福部 昭が採取したサクラの標本の写真とともに、それにまつわる話が書かれていて、ボランティアニュースNo. 62「伊福部 昭のサクラ」(ボランティア加藤康子さんの記事)が紹介されていた。ボランティアニュースの面目躍如である。コツコツとボランティアでニュースを編んで来られた方々、原稿を寄せて下さった方々、皆にとって喜ばしい出来事であった。

この日は伊福部の命日ということもあり、会場には伊福部のパネルコーナーがあり、来歴が紹介されていた。ここでも私はいつもの疑問を抱いた。

伊福部は、少年時代音更でアイヌの言語、音楽、舞踊に親しみ…と語られる。9歳の少年がたとえ町長の息子とはいえ易々と他民族の懐深く入り込み、その姿を見せてもらえるものだろうか？まして江戸の昔からアイヌの人たちとの緊張関係が続いていたであろう大正時代である。

学生時代、短期間ではあるが、国内の僻地と呼ばれていた地域で、民俗や風習の聞き取り調査の経験のある私には簡単にはいかないであろうと思われる。人の意識が作り出した文字や貨幣を介さない人と人とのやりとりは、人間性で挑み接するしかない。その当時の事をインタビューに答えて伊福部は「アイヌの人は誰にでも見せてくれた訳ではないよ。」と語っている。伊福部の作り出した音楽の素晴らしさは周知の事実だが、その人物像、思考の源を深く解説したものにはなかなかお目にかかれていなかった。が、今回私の腑に落ちる伊福部を書いた本を見つけた。

柴橋伴夫著『生の岸辺 伊福部昭の風景』である。「彼の耳はいつも平等だった」この本の第14章にあるこの一文は伊福部を表わす何と素晴らしい表現かと思う。明治以降、西洋由来のものを一番価値が高いと位置付けていた日本で、「平等な耳」でアイヌの音も聞き感性で判断する。素晴らしい感嘆してしまう。

作者の柴橋は、「伊福部は『知の考古学(アルケ

オロジー)』に挑んだ『知の人』でもある。学者といかえてもいい。(中略)『民族的音とは何か』、『人間と音との密なる関係とは何か』を探りながら、未知の原野を歩きながら『音の至高点』を探した。飽くなき『音の狩猟民』となった。」と語る。

表題としたアイ アイ ゴムテイラはギリヤーク族の言葉であり(それは それは 困ったねの意)であり、伊福部作詞の古歌の題名でもある。

伊福部は北海道帝国大学理学部でラテン語などの語学を教え、ギリヤーク語の研究者であった服部健(1909-1991)と樺太に行き、服部が樺太で録音して来たギリヤーク族の民謡から曲を作った。柴橋は、「採譜された音、それを原材料にして現代曲を創作する。いうのは簡単だが実際はとても難しい。」と解説する。また、伊福部自身は「樺太ギリヤークは音楽的に見て非常に変わっているので興味をもっているわけですが、彼等は、今日は殆ど自分達民族の民謡すら忘れていて情けない状態なので誠に惜しいと思って研究している訳です。トシクル(楽器)は白樺の皮を輪にし、その上に鮭の皮を張り馬の尻毛を弦としたものを同じ馬の毛の弓で弾くものでなかなか北方的な楽器です。他の民族にも同じ形と材質を使ったものがあるのでその発生には相当面白い関係があるのではないかと考えています。」と語っている。柴橋は、「私達はこうした地道な研究作業から、代表作『ギリヤーク族の古き吟誦歌』が生まれたことをしっかりと知るべきである。」と結ぶ。

優れた多岐にわたる才能を授かって生まれ9歳の子に老子を素読させ教授できる父を持ち、手回し蓄音機で西洋音楽を聴くことのできる家庭に育ちながら、いつも平等な耳を持った伊福部昭とは何と見事な先達であろうか。

伊福部の作曲家以外の面を強調した特別展を、是非、ゆかりの深いこの北海道大学総合博物館で観たいものである。

この希望を耳にされた博物館企画展担当の方は「アイ アイ ゴムテイラ(それは それは 困ったね)」とつぶやかれるかもしれない。

大氷原にホッキョクグマを求めて

総合博物館 館長 坪田 敏男

我々を乗せたヘリコプターは、あっという間にハドソン湾上空に達した。パイロットのシェーンが巧みにヘリコプターの向きやスピードを操りながらルートを決めていく。前シートに座る2人が、直下の海氷に目を凝らし、ホッキョクグマの足跡を探し続けている。後シートは、大学院生のデイビッド、札幌市円山動物園のホッキョクグマ飼育担当の鳥居佳子さん、そして私の3人が占める。左側に座した私は左後方に広がる海氷面の変化を楽しんでいた。時に急激にスピードを上げて円弧を描くように旋回しながら高度を落としていく。すると、何か動物の足跡らしきものが眼前に現れる。ホッキョクグマ・トラッキングの開始である。しばらくのトラッキングの果てに‘大きくてやや黄色味を帯びた物体’に出くわすのである。

昨年4月に、カナダ・ハドソン湾でのホッキョクグマ生態調査に参加することができた。長年の友人、カナダ・アルバータ大学のアンドリュー・デロシエール教授（以下、アンディ）に頼んで、初めてホッキョクグマ生態調査に参加させてもらった。日本からシアトル-カルガリー-ウィニペグを乗り継いで最終目的地のチャーチルに降り立ったのが4月14日であった。まだ寒さが残るチャーチル空港には“ホッキョクグマの街へようこそ”との看板が掲げられている。遂にホッキョクグマの聖地にやってきたことを実感する。早速宿から迎えに来てくれたスタッフのジェイソンが運転するワゴン車に乗り込み、20分ほどで郊外にある“Churchill Northern Study Center”に到着した。ここをベースにして、ヘリコプターによるホッキョクグマのトラッキングや生態調査を経験することができた。天候により10日間のうち調査に出られたのは4日間のみであったが、その間に9頭のホッキョクグマ生態調査に立ち会うことができた。

実は、20年ほど前にホッキョクグマ調査に参加する画策をしたことがあった。文科省の助成研究でノルウェーの極地研究所を訪れる機会があり、そこでアンディとは初めて対面した。すぐにホッ

キョクグマ調査への参加を打診したところ、ノルウェーでのホッキョクグマ調査への参加を受け入れてもらえた。旅費の予算も確保でき、あとは出発を待つだけとなっていた。ところが、受入先のアンディが急遽カナダ・アルバータ大学の教授として異動することが決まり、あえなく断念することとなった。というわけで20年来の念願がようやく叶ったのである。

話を冒頭に戻すと、もちろん‘大きくてやや黄色味を帯びた物体’はホッキョクグマである。最初に対面したのは、アンディが“Big guy”と叫んだ、でかいオスのホッキョクグマであった。姿を確認すると、すぐに少し距離をおいた場所に着陸し、後シートに座る3人を降ろしてアンディだけが後座席に乗ってホッキョクグマのところへ戻っていく。そこからは直接見ていないので詳細はわからないが、アンディがライフル銃で麻酔薬をダートし、完全に眠るまでヘリコプターで待機する。麻酔が効いたら、我々を迎えにきてくれる。そしてホッキョクグマのハンドリング（採血、計測、脂肪バイオプシー、GPSイヤタグ装着、抜歯など）を開始するのである。およそ30分で作業を終了し、また次のターゲットを探しに向かうのである。

これまで私自身、ヒグマ、ツキノワグマ、アメリカクロクマ、ナマケグマの研究を行なってきた。これで5種目のクマ研究に携わることができた。クマに関わり始めたのは45年前、今でもクマの調査や研究がおもしろくて仕方がない。



ホッキョクグマと坪田館長

雪の妖精 シマエナガ ～私たちが「範」とすべき素晴らしき生態～

自然写真家・シマエナガの伝道師 山本 光一

この度、北海道大学総合博物館で写真展「恋するシマエナガ～愛すべき7g～」とそれに関連した講演会やワークショップを実施させていただいた背景や狙いをお話ししたいと思います。日本では北海道のみに生息し、雪の妖精とも呼ばれ全国的に大人気の野鳥「シマエナガ」。この鳥の魅力はモフモフ、フワフワとした雰囲気に、めんこい（可愛く）仕草や表情から多くのメディアにも注目が集まり、そこにフォーカスした写真集も数多く出版され老若男女を魅了している。しかしながら、この野鳥の持つ本当の魅力は私たち人間が範とすべきその生態にあると思っています。「私たちが『範』とすべき生態 ①折れない心」シマエナガは巣をかける樹木（樹皮）などにそっくりな模様・質感の球状の巣をつくるのですが、人間の目ではその巣を見つけることは難しくとも、彼らの卵や雛を虎視眈々と狙うカラスやヘビからすればたやすく、その多くは壊されます。また、北海道では季節外れの降雪や豪雨などの悪天候も大敵に他なりません。様々なアクシデントで巣を壊されれば繁殖を断念する野鳥も多いですが、シマエナガは育雛に間に合えば幾度となく造巣を試みる「折れない心」を持っています。「私たちが、『範』とすべき生態 ②社会性(協調性)」。繁殖期以外は基本的に「群れ」で行動しているシマエナガですが、時にシジュウカラ、ゴジュウカラ、コガラなどのカラ類を筆頭に、小型のキツツキであるコゲラ、また、場所や季節によってはクイタダキ、メジロなどの小鳥がシマエナガの群れ混じることがあります。森の中での私の実験ではシマエナガの鳴声を流すと数分程度でこれらの鳥たちが集まってきます。（ちなみに同じ場所で逆にカラ類の鳴声を流してもシマエナガの飛来を確認することはできませんでした。）シマエナガは前述のように一年の多くを群れで生活しており、天敵の猛禽類などの急襲を防ぐため相互のコミュニケーション能力や危険察知能力が高いとされ、他の

小鳥たちもこの恩恵にあやかるためにシマエナガの群れに合流するのではと考えられています。合流される側のシマエナガも結果、多くの目で危険を察知することになるのか、積極的に排除（攻撃など）する行動は見られません。また、シマエナガの唯一群れていない時期である繁殖期において天敵や様々なアクシデントにより巣を壊されたりパートナーや雛を失い繁殖を成功させることが出来なかった個体が「ヘルパー」として他のつがいの育雛（給餌）を手伝う姿を見かけることも珍しくありません。シマエナガの持つこれらの生態（行動、性格？）に、日々触れる度に強く感じる事、昨今、国外に目を向ければ自分たちと違う価値観（文化・風習・人種・宗教）や自分（自国）の意見のみが正義と言わんばかりのウクライナとロシア、イスラエルとパレスチナなど痛ましい紛争、国内に目を向ければ子供から大人に至るまで「イジメ」という名の犯罪行為で尊い命が絶たれるニュースが溢れかえっている。シマエナガはたとえ理不尽であっても、その使命や想いをたやすくは諦めない姿、同種、異種を問わず共に助け合い共存していく姿、私たち人間はどの動物よりも優れた英知を持つ万能の神と過信し愚行を繰り返す、こんな時だからこそ私たちはシマエナガを「範」としながら、身近な自然と生命（いのち）の大切さ、素晴らしさについて考えていくことが必要だと強く思います。

この私の「シマエナガの伝道師」としての活動の趣旨に賛同いただき、写真展、講演会、ワークショップなど様々な機会を提供いただきました北大総合博物館には心からお礼を申し上げます。



シマエナガ名物のヒナ団子

円山動物園を訪ねて

化石ボランティア 尾崎 美雪

2023年10月27日金曜日。煙るようなユキムシ（アブラムシの仲間）の大群の中、円山動物園に「第29回博物館に押しかけよう会」の参加者16名が集まった。

まずはゾウ舎へ。お目当ての仔象が見当たらない、と思ったら、いた。地面に思い切り寝転がっている。無防備極まりない。しかし野生でもこんなもので、大人の象が周囲を警戒して見守らしている。動物というものは長時間眠らないらしく、じきに仔象は目覚めて母親に甘える可愛らしい姿を見ることができた。ちなみに仔象の出生時体重は90キロでこの日の体重は約240キロ。母乳だけでここまで大きくなるとは。

その後、ゾウ舎の外でボランティア解説員の高橋さん達と合流。ボランティア解説員の方は蛍光グリーンの専用の上着を着用していた。しかしこれがユキムシには魅力的だったのか虫が上着にやたら沢山止まっていた。暗い色の上着を着ている参加者には全然虫が付かなかったもので、ユキムシは明るい色が好きなかもしれない。息をしても虫を吸い込みそうな状況でマスクを着用しての解説は大変息苦しかったと思う。ご足労をかけてしまったが、解説のおかげで普段よりも充実した時間を過ごせた。高橋さんありがとうございました。

ユキムシの話はさておき、その後はモンキーハウス、チンパンジー館と解説を伺いながら移動。チンパンジー館でアクリルの壁越しに我々が群れを観察していると、一頭のチンパンジーがやって来て壁の向こうにのっそりと座り込んだ。まるでオッサンのように思わず笑ってしまったが、向こうは明らかにこちらを見物している様子。なるほど、見物するのは人間の側だけでは無いようだ。

記念撮影の後、エゾシカ・オオカミ舎の前で解説を聞き、エゾヒグマ館ではキャベツをむさぼるエゾヒグマを観察。ヒグマは草食よりの雑食。鮭をくわえているのはアラスカや知床のクマか木彫りの熊くらいのような。



母象について回る子象

最後はホッキョクグマ館へ。館内の通路が水槽の中でトンネルになっており、アザラシが優雅に泳ぐ姿を見られた。と言いたところだが、実際にはアザラシは顎を岩に載せてプカプカ浮いて動かない。ここからだといふお腹しか見えない。腹も可愛いのだが、泳ぐ姿が見られないのは残念。ホッキョクグマ館の中はアザラシゾーンと隣接しており、すぐ近くの陸地をホッキョクグマがウロウロしている。それなのに昼寝を決め込むアザラシはずいぶん呑気なものだと思ったが、壁で仕切られているので襲われる心配は無いらしい。

これでは何だかシロクマがお預けを食らっているようで可愛そうだ。実際にアザラシを襲わせる「リアルもぐもぐタイム」があると面白いと思う。しかしいろいろな意味で問題がありそうなので実現は無理だろう。

ボランティア解説員の方にはときおりこちらの質問にも答えていただき、いろいろお話を伺えたので充実した1時間だった。実際に解説員の方と回れたのは園内の半分。今回は時間の都合でもう半分は見られなかったのが家族と共にまた来たいと思った。

その翌々日、今度は子供にせがまれて再び動物園に行った。しかし日曜日なのでゾウ舎の前は行列ができていた。

ユキムシはいなかったので見学はしやすかったが、ゾウを見たいなら平日の午後の方がお勧めのようだ。

ポプラチェンバロで奏でるイギリス黄金時代の鍵盤作品 ～W. バード没後 400 年～

チェンバロ ボランティア 新妻 美紀

イギリスでは 16 世紀後半、エリザベス一世の下で市民文化が花開き、音楽においてはヴァージナリストと呼ばれた作曲家が活躍しました。ヴァージナルとは、イギリスでは撥弦楽器のことで、チェンバロと同義語です。エリザベス女王がヴァージナルを愛好したこともあり、作曲家たちは競って曲を書きました。

今年はウィリアム・バード(ca. 1540～1623)の没後 400 年にあたる年でもあるので、メモリアルコンサートとして、バードの曲を中心に他の作曲家達の作品をプログラムにしました。

バードは幅広いジャンルに優れた音楽を多く残しその功績から「英国音楽の父」と称されました。特に声楽曲は宗教的、世俗的な作品が数多くあり、鍵盤曲も 100 曲ほどあります。

バードはイギリス国教会を避け、生涯カトリック教徒であったため、さまざまな苦難を味わっていましたが、エリザベス女王はカトリック教徒であったバードに対しては、積極的に活動の場を与え、楽譜の出版権を与えるなど相当優遇されていました。

1591 年に完成された「ネヴィル婦人の曲集」という手稿譜は現在大英博物館に所蔵されています。コンサートでは、この楽譜に収められている 42 曲の中の 3 曲を演奏しました。特に「ウォルシンガム変奏曲」は、バードの鍵盤作品の中で力作とも言われている曲です。

宗教改革で、巡礼地ウォルシンガムの修道院が壊され、マリア像が焼かれてしまったことを嘆いて作られたこの曲はメランコリックなメロディで、

当時大変流行しました。バードも嘆き悲しみ、このメロディをテーマに 22 の変奏曲を書いています。演奏していても、バードの悲哀が伝わってくるような感じです。

このコンサートでは、学生ボランティアの石川弘晃さんもジョン・ブルのインノミネを演奏してくれました。インノミネは、当時の作曲家達が書いた器楽曲の名称です。

また、石川さんの提案で、チェンバロの調律を変えてみました。チェンバロの調律は、時代や作品によっていくつかの調律法があります。今回のコンサートの作品に合う、ミーントーンという調律で、鍵盤音楽の中に独特な世界を形成しています。石川さんによる調律の説明、曲の合間の実際の調律を見て、皆様も興味を持ってくださいました。

あまり演奏される機会も少なく、初めて耳にする作曲家もいたかもしれませんが、当時の音楽に触れて頂けたことと思います。

また、ポプラチェンバロが、ヴァージナル作品にとっても合う音色でもあったと感じました。



新妻美紀さんと石川弘晃さん（農学部 4 年）

北海道大学総合博物館ボランティアニュース No. 68

- ◆編集人：北海道大学総合博物館ボランティアの会（編集委員：星野フサ、今井久益、久末進一、山岸博子）
- ◆発行人：在田一則
- ◆発行日：2024 年 4 月 1 日
- ◆連絡先：〒060-0810 札幌市北区北 10 条西 8 丁目 Tel: 011-706-2658
- ◆ボランティアニュースは、バックナンバーも含め、総合博物館ホームページからご覧になれます。

<https://www.museum.hokudai.ac.jp/lifelongeducation/volunteer/volueernews/>